

学習院大学 令和3年度「学生の提言」 講評

つまらなくては始まらない。だが満足だけでは足りない。

令和3年度 学生センター所長
村主 道美

大半の教育は一对多の時間と場である。大学教育を含め、量的にみて過半の教育では、講義、演習、実技、実験等々、複数からなる学生集団が、場所と時間を共有しながらその能力を教師の力を借りながら鍛える。少なくとも最近まではそうだった。ある曜日のある時間帯に、ある場所で、履修者は教師の話の聞いたり、教師を含めて討論したり、教師に質問したりする。むろんそれだけで教育が完結するわけではなく、宿題が出され、個人はそれぞれの別の場で読書したり、練習したり、ペーパーを書いたりする。なぜ級友にできることが俺にはできないのだろう、といったライバル意識もこれに関わる。これと対照的なパターンのひとつは家庭教師である。教師と個人が殆ど一対一の形となる時間と場が存在することになり、他の学生の存在はあまり想定されない。それとさらに違うものは、通信教育である。伝統的には、問題が郵便で送られてきて、学生はそれに教材を読みながら答え、添削してもらって教師からのメッセージが戻ってくる。それを参考に、あるいは励みにして学生は学習し続ける。

だがこの通信教育ともさらに異なり、オンライン技術の発達とともに、空間をも時間をも共有していないのに共有しているように思わせる、Virtual な方法が教育の場にも表れ始めており、それが新型コロナウイルスの拡大によって、教育の場で最大限に活用されることになった。

良い教育とは何か、教育の成果をどう評価するか、という問いは、永遠に社会が問い続けるだろうが、誰からそれを問うかにより、重点が異なりうる。学生は、自分が満足できるか、を重視する。その満足とは、自分が賢くなったという実感を含むだろうけれども、その他に、良い成績が取れたか、あまり苦労はしなかったか、それをやって楽しかったか、等の多様な要素が含まれる。これに対し教師の側からは、学生を賢くできたか、が最も大切なことであろう。だがここでの賢さとは複合的な概念であって、必ずしも授業の終了直後だけで測定できるものではない。

ここで学生の立場と呼んだものと、教師の立場と呼んだものとの、どちらが優先されるべきか、という点になると、通常の社会的・国家的視点は、自明である。その典型は入試で、入試は試験の結果によって応募者から選択し、応募者がそれまで勉強を楽しんできたか、主題に対して満足感を感じながら取り組むタイプの学生かどうか、今は学力が不足で

も、今後興味を持って勉強を続けてくれてアインシュタインのような成果をあげてくれるか、といったことは、完全に省いている。名馬の素質を持つ馬は常にあるが、**伯樂は常にはいない**。だから逆に、この空隙を突いた方法で人を選択しようとする大学もあるだろう。

審査委員達の投票によって入賞者は決定された。山崎彩華「学生が満足するビデオ・オンデマンド授業とは」は、オンライン授業を履修してきた一定数の学生に行った調査に基づき学生の学年、性別、高校時代の授業態度、といった本人の属性と、オンライン授業の属性(用いられるビデオの長さ、教員の顔が示されているか、課題の量)、といった情報を入れながら、どんなオンライン授業が履修者を満足させるかについて統計的手法で分析し、その中で筆者が出発した仮説——履修者の授業に対する距離感が短いことが満足を高める、という仮説は肯定された。

これは教師にとってすぐにでも採用できるひとつの手法となりうる。だがここには学生に授業に対する、矛盾した意識も現れているように私には思われる。自分を表示することによって相手は自分に近づけるが、学生は自分自身は Zoom の中で見られたくない、教師と他の学生が Zoom で見えれば、彼らに自分は近づくのだが、自分は自分を彼らに見せて、彼らが自分に近づく状態を避ける。ネット上の距離感は、物理的な距離感とは異なり、相互的ではない。A が B に近いと感じるが、(つまり B は A からよく見えているが)、B は A が自分に近いとは思っていない。(つまり A の存在は B にとってよく分からない) プライバシーという概念が幅を利かせて、人類が長年持ってきた当たり前の関係を、Virtual 空間において歪めている。

上記論文と対照的に、コロナの中、学生はどんな問題を内在させる環境で、学生は、オンライン授業にどう向き合うだろうか、という、総合的環境に注目して加藤虎太郎「学生から見えたオンライン授業について～オンライン授業の教育効果と学生の健康状態に着目して～」は考える。授業に対する議論のみならず、学生が受けるストレスの問題なども入ってくる。例えば、コロナの中での大きな問題は、身体活動量の低下である。これは分かりやすそうに見えて、考えてみると不思議なことだが、個人が自分の体を動かすことは、教室での対面授業が不可能なほどには難しくはないはずである。外を走ることはできるし、部屋の中でも体を動かせる。しかしそれができないということは、人間のストレスが、人の体を動きにくくする、という面があるのかもしれない。動かないことがさらにストレスを加算する、という相乗効果もありうる。

この視点からすると、問題は学生の人間的生活を維持するためにはどのような大学のあり方が望ましいか、ということになるだろう。対面形式の授業の存在は、たとえその授業自身が大きなその内容の伝達において大きな効果を上げることができない場合であっても、学生と学生、学生と教師とを伝統的な場と時間の中で接触させることによって、健全さ維持

に役立っている、とも考えうる。長年、対面形式でいがみあってきた教授達が Zoom 会議をし始めることは良いことかもしれないが、学生は、一度も直接会ったことのない級友と、Zoom 形式の授業の中で出会い、直接会わないまま別れる、ということが、望ましいことかどうか疑問である。コロナの中、私は感染予防が最優先課題だと考え、私の教える内容はすべてオンラインでできるので、対面をする必要はない、と言う教師もいるわけだが、加藤論文の視点からは、大学の学生への義務は教えることだけには尽きない、ということになるだろう。

ただストレスの感じ方は、人により相当の差がある。私は学生の頃、大教室が牢獄に見えた。そこでは自分は家畜のように、おとなしく聞いていることを要求され、退屈で出て行きたくとも、行動の自由を束縛されていた。どうせ授業の脱線も、他の学生との意見交換も、教師に対する質問の機会もほとんどないならば、むしろすべてオンラインのビデオ収録されたものを聞いた方が、自分としてはストレスが少なかったと思う。つまり多くともせいぜい小学校のクラス程度の人数の中で、参加者がお互いの名前と顔を覚え合うような community ができるならばそれは最も快適だが、その数倍以上の人数になり、お互いの顔も名前も、同じ教室にいても分からず、といった場合には教室にいることのメリットが乏しく、むしろ完全に教師対不特定多数を想定した授業形態のものに自分の部屋から参加したほうが、ストレスが少ない、と考える人も少なくないだろう。

出口隼詩「コミュニケーションを重視したオンライン授業について～反転授業を取り入れる～」はオンライン授業の進め方、例えばそれを履修する側の体力の配分、授業時間の分割などにも触れている。授業計画、進行のテクニックに配慮した記述なので、教師には参考になる。反転授業という、教師が題材を事前に学生に十分に読ませておいたうえで用いる授業形態について、希望を持っている。本来ならコロナがなくても日本の大学において行っておくべきだった工夫を、コロナを契機に迫られるということだろう。授業ではその場でしかできないこと、例えば学生の変な質問、教師のインフォーマルな説明、等がなされるべきで、教師が型どおりの説明をするのが授業なら、オンラインでも対面でもあまり変わらないことになる。

受賞作品以外の応募論文について、法学部3年の学生から提出された提言では、オンデマンド型とリアルタイム型との両方を使ったオンライン授業の在り方を提案しているところが注目できる。これは、比較的少人数の場合のオンライン授業では可能だろうが、50名を超えるなど、多人数になると技術的に不向きとはなるだろう。大学は、対話性を持つ授業をもつべきである。また、文学部2年の学生から提出された提言が指摘しているように、学生は無気力になりがちだとすれば、オンラインで気力を出させることができるだろうか。オンライン授業でも、小グループでコミュニケーションをとれることが履修の励みになる、といったアドバイスはなかなかおもしろい。悪く言えば、教室における「私語」「いたずら」「冗談」をもできるようなオンライン授業が、より本来の授業に近づくとということになるだろうか。

もちろん、弊害もある。学生は教師から学ぶもの、他の学生は不要、と考えるか、学生は、学生から学ぶもの、教師がいてもいい、と考えるか。ほかの大学など、ひとつの大学に限界づけられない教育が可能であるという意見を紹介しているのも興味深い。法学部3年の学生から提出された提言は、西洋の大学が、知識のために人々が集まったのに対して、日本の場合には、政府が作ったという起原の問題を重視し、そのことから、知識欲に置いて劣る日本人でも、大学が勉学するように努めさせるには、教師からのフィードバックが、学生が自身の勉強に対する方法を改善させるための刺激となるようなものでなければならぬと主張する。これは確かに有用で、実は、これまで行くと、教員の負担は増えることになる。そのフィードバックのために TA の活動の拡大などを述べているところは私も全く同感である。さらに、履修形態の変更（例えば、時価何体が重なっている複数の授業を同時に履修）などの提案は、将来的に技術的な大学側の検討課題となりうるだろう。経済学部4年の学生から提出された提言は、オンライン授業のメリットを指摘しつつ、日本の ITC 教育が、外国に比べ遅れていること（自宅でも、学校でも、諸外国ほど日本人は PC を教育に用いないことを指摘している。日本は一部の発展途上国にも学生の PC 利用率で遅れているらしい。コロナ拡大を通じてこの点が改善されるのはよいことである。法学部4年の学生から提出された提言も総合的に考え、例えばオンライン参加の学生と対面参加の学生が一つの授業に混在する場合に起こりうる問題であるとか、教員の負担の増大が、その研究棟に与える圧迫についても触れていてくれているのは教師としてありがたい。実際、授業の中で対面と遠隔を同時に行おうとして、機器の準備だけで15分以上かかってしまうことが私にもあり、複雑な機械の準備よりも、次善の策として、その場にはいない者と携帯電話で繋がるほうがはるかに効率的だと実感することがたびたびあった。

自分の考えを整理し、過去2年間の自分の経験を紹介したり、この2年間で行われた色々な大学その他の機関での調査とか、発表された研究等を利用して、論点を提示し、大学の在り方という根本問題まで時には言及しながら、整理してくれた応募者諸君に感謝したい。ただ自分が所属する、学生という集団をやや均一的に捉える思考の偏りがあるのではないかと、とも私には思われた。学生の中には教師の話に陶醉してみたいと思って期待して教室に来る勉強家もいれば、いわゆる「ラクタン」で卒業できればいいと考えている残念な学生もいる。Zoom でも顔を出して参加し、教師に外国語を発音する時の口の形の誤まりを直してほしいと思う向上心旺盛な者もいれば、自分の名前が出て出席していることになれば単位は落とすことにはなるまいと踏んでいる、最低限の合格ラインしか目指さない学生も不幸にしている。教師から見て、尊敬に値する学生は多いが、全体として、そうではない学生の方が多い。そうではない学生は在日留学生よりも、日本人学生の方にはるかに多い。それなら当然、これと似たような社会が抱える一般的問題、つまり芸術にせよ、言論にせよ、＜良いものが売れるのか、悪いものが売れるのか＞がこのオンライン授業についても成立するはずである。

受賞者は参加者の一部になってしまったが、審査員達は**伯楽ではない**。評価は提言の書き方としてどの程度整理し、論理が整っているか、という部分に基づくところが大きく、キラリと光るポイント、ユニークな視点という点では、受賞者以外の中にも多く優れた部分があった。受賞者はもちろんだが、受賞しなかった者も、選考という行為は選ぶものもまた試されているのだということを知りつつ、自分が今回書いたものをさらに拡大、改善、洗練させて更に別の形での発表を狙うといいと思う。ただ、学生として、どのようなオンライン授業が満足を与えるか、という点からは全体として抜け切れてはおらず、どんな教育が人間を作るか、能力を高めるか、という点をも含めて考え続けてほしい。

教師として昨今を振り返るとき、オンライン教育で得にくいものは、勉強にとって最も必要である「驚き」だと私には思われる。私が勉強においてこれまで最も驚いたひとつの瞬間は、小学校3年生くらいの算数の授業であった。先生が、みなさん、この三角形のそれぞれの角を分度器で測ってごらんさい、そしてその3つの角を足してごらんさい。はい、先生180度です。ではこの三角形はどうでしょうか。はい、先生180度です。では次の三角形はどうですか。と聞かれ、なぜみんな180度なんだろうと仰天した瞬間の経験である。学ぶとは驚くことである、と身に染みた瞬間であった。これは、予想されていない時に、予想されていない教え方で、教師が生徒を驚かせた、という点が大切なのであって、もしシラバスがあってそれに、〇月〇日の授業予定 三角形の角の合計が180度であることについて等と書いてあったら、全然生徒は驚かず、教育効果はほとんどゼロであったろう。これと似た私の次の経験はそれから半世紀以上もしてから、偶然見たNHKの「ダーウィンが来た」で、森の中の鳥が、自分とは種類の違う鳥とコミュニケーションをとるため、トリリンガルとなることを知った瞬間である。

だが文科省はシラバスという予定表を好み、予定表はそこにかかれた項目を見る学生にとって、内容を理解する前に、見慣れたものにしてしまう。つまり、世界ってどうなっているのだ、という、昔なら人が偶然に出会った疑問は押し潰され、それはますます予備校的になるオンライン教育の時代に、さらに激しくなるはずである。その点については前回のビデオで先生が話していた。その点については次回のWebclassに資料が乗るだろう、と学生が知れば、学生はそれらの資料を食べる家畜となる。人間の知識欲が、どのようにすれば機械により抑制されるのではなく、逆に強まるか、といったことも考えながら、この将来の授業のあり方の問題を考え続けてほしい。

学生も教師も、教育のあり方について考えるべきことの多い2年間であったが、今後の大学教育の中で、本当は今後の課題として

- (1) 後遺症の問題 コロナ時代の閉鎖的大学を経験した世代は、対面式授業の不足から、結局、どのような長期的な影響をその能力や人格形成において受けるのだろうか。
- (2) 更生の問題 悪影響も持続すると考えられる場合、どのようにリハビリし、改善していきけるのだろうか？

といったことも残る。だが爆弾を体内に抱えながらも学生は結局卒業してしまうのであって、大学は卒業生に沈殿する、見えない問題について、積極的な役割は果たさないであろう。国家はこの問題に、取り組んでくれるのだろうか。